

# きょうだい児として生きる

橋本 尚典

本論文は、障害を持つ兄弟姉妹である「きょうだい児」の生きづらさを取り上げ、その支援や理解の必要性について考察した。障害者の家族としての視点から、きょうだい児に焦点を当て、特に自助グループである「きょうだい会」や、その一部である「ファーストペンギン」の活動に注目し、インタビューも通じてきょうだい児の経験に迫った。

第1章では、「きょうだい児」の定義とその課題を紹介した。きょうだい児は、障害のある兄弟姉妹を持つ子どもたちであり、障害者支援が進む一方で、その家族に対する支援は不足している現状がある。特に、きょうだい児は家庭内での負担や孤独、精神的な不安感を抱えやすく、それらが本人の人生に大きな影響を与えることが指摘されている。「きょうだい会」は、「全国きょうだいの会」が1963年に設立されて以来、全国に広がる自助グループであり、きょうだい児の悩みを共有し、社会にその支援を訴える活動を行っている。この会では、障害者本人への支援だけでなく、きょうだい児やその家族への支援を訴えており、会員同士の親睦や相談活動、研修や情報提供、福祉制度の充実を目指す活動を行っている。また、2022年には「障がいのある人のきょうだい」に関するアンケート調査が行われ、その結果から多くのきょうだい児が抱える課題が浮き彫りになった。

第2章では、「ファーストペンギン」というきょうだい児の会について取り上げた。2016年に立ち上げられたこの会は、特に20代・30代のきょうだいを対象とした活動を行っており、参加者が自身の人生を自分で選択し、過度な責任を感じずに生きていけるよう支援している。会は、きょうだい児が自分の悩みや不安を共有し、同じ境遇の仲間とつながる場として、重要な役割を果たしている。

第3章では、実際のきょうだい児とのインタビューが行われ、具体的な悩みや経験が明らかになる。インタビューを通じて、きょうだい児が学校生活や家庭内で感じる生きづらさ、社会的なプレッシャー、そして自分の人生をどう選択するかという悩みが語られた。特に、社会で障害者に対する偏見や理解不足が、きょうだい児にとって大きな負担であることが明らかになった。

第4章では、改めてアンケート調査の結果を参考に、これらの課題に対する解決策を提案している。教育機関や福祉施設におけるきょうだい児への支援体制の強化が必要であり、スクールカウンセラーや教師がきょうだい児に気を配ることが大切とし、障害に対する理解を深めるための教育や、障害を持つ子どもと健常な子どもたちが日常的に交流する環境を作ることが、偏見を減らし、共感と理解を促進するために重要だと強調した。

総じて、きょうだい児はしばしばその負担を一人で抱え込んでおり、その苦しみは表に現れにくいのである。彼らに対する社会的なサポートはまだ十分とは言えず、特に教育現場や

福祉の場での理解と配慮が必要だ。この研究を通じて、きょうだい児が抱える課題への理解と支援が広がり、より生きやすい社会づくりが進むことが期待される。